
錆びた心 ～かつての自分を取り戻すために～

たのシイナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

錆びた心 〴〵かつての自分を取り戻すために〴〵

【Nコード】

N2933P

【作者名】

たのシイナ

【あらすじ】

定年退職して自分の居場所を探す夫と、過去を振り返り、虚飾な今にしがみつく妻……。

1. 置時計

定年退職するまでの数週間、昼休みになると石嶋達郎はいつも一人でいて、考え事をして過ごした。

それに、まっすぐ家に帰ったことが一度もなかった。

いつも川岸をうろついて川を眺めていた。お決まりの場所に立ち、ハイライトに火をつけて深々と吸い込む。

足元では澱んだ水が川辺を舐めるようにゆったりと流れ、街灯の光が届くあたりだけが一瞬煌いていた。

「仕事を辞めたら、どうするつもりだ？」

同僚からそう訊かれた。それは退職を一カ月後にひかえた一九九〇年の晩秋のことだった。

「なにもしないさ。のんびりさせてもらうよ」

今となっては、それが本心だったかどうか、達郎には分からない。こうして退職してみると、生活がそれまでとは随分違った。

最近では働いていた当時のことは、もうぼんやりとしか思い出せない。

四十年近い歳月の重みが、今、達郎にのしかかっていた。

かつて誇らしげに語っていた仕事なのに、もう失敗したときの思い出しが浮かばないのが情けない。

彼がいた会社は退職者に置時計をくれた。それはどっしりとしたもので、秒針が付いていないタイプだった。

秒針など有ると追い立てられるようだし、せわしなくて嫌だと達郎は思った。

数日は居間のソファアームに座って、それを眺めていた。

だが、ある日の午後になると、とうとう時の経つのがあまりに遅く感じられてきた。

時計が止まっているのかと思った。何度も何度も立ち上がっては、置時計を手にして耳に押しつけた。でも、音は一度も聞こえなかった。

あの喧しかった工場のせいに違いない。

しばらく見つめていて、達郎はようやく分針が動いたことに気づく……ああ、これなら大丈夫だ。

妻の晴子は、達郎が家に居るのを嫌がった。彼女が台所で鍋の音を煩く立てるので、達郎は新聞を読むこともできずに、緊張してその音を聞いた。

晴子が居間を掃除するときには、いらいらした様子で掃除機の先端を達郎の脚のあいだに突っ込んできた。

だが、それも分からないことではない。晴子は自分一人で家に居るのに慣れていたのだ。以前は自分のペースで家事が出来たのだ。

それから、子供たちが訪ねて来ても状態はそう変わらなかった。たいていは、

「こんにちは父さん。元気だった？」と言う。

でも、子供たちが会いに来たのは母親の方なのだ。

だからといって、それを妬む気持ちはなかった。彼女は良い母親だし、これ以上の母親は望むべくもないほどだ。

でも時には、羨ましく思うこともあった。晴子は子供や孫に囲まれて、とても落ち着いているように見えた。

そんなわけで、達郎はできるだけ家に居ないように心掛けた。しかし、どこか出かける所を探すのは難しかった。

年金をそっくり妻に渡し、その中から彼女がいいと思うだけ小遣いを貰っている。

子供たちがときどき母親に少し援助しているのではないかと思うことがあるが、この先の生活や健康面にかかる医療費のことを考えれば、そうするしかなかった。

そんなわけで自分の小遣いはほんの雀の涙だ。ビールを一、二杯に煙草、それで終わりだ。

最初はかつての職場の仲間と就業後を待つて付き合いを続けようとしたが、長くはもたなかった。

次回みんなに奢るだけの持ち合わせが有るかどうかと、考えながら座っているのが苦痛だった。

みんなが達郎にそれを期待していたわけではない。達郎が自分でそう思っただけだったのだが――。

それに、しばらくすると話題についていけなくなった。人の名前や作業工程のことさえ、達郎にとっては初めて聞くものにならなっていた。

新しい契約が成立しなかったとか、また一部人員整理があったとか。そういったことが話題になったが、どれもこれも達郎にはもう無縁だった。

それで付き合いも次第に遠のき、とうとう居酒屋で飲むこともばったりなくなつた。

年をとると誰からも相手にされなくなると思い込んだりもした。みんな、何か下心があるんだろうと俺のことを思っているに違いない——小銭が欲しいとか、酒を奢って欲しいとか。

達郎は苦々しく思った。

でも実際は、昔の仲間が達郎を避けていたのではない。達郎のほうで仲間を避けてしまっていたのだ。

そんなこんなで、達郎は近所の公園に足を運ぶようになった。天気が良いときは、寄り集って日向ぼっこをしている他の年寄り連中から、ちよつと離れたベンチに一人で座って時間が過ぎるのを待っていた。

あの老人たちは甲羅の中から外を窺う亀のようだ。結んだ赤いマフラーのあいだから、おどおどと皺くちゃの首を突き出している。

しかし、天気が悪いときには図書館へ行った。
公園が気を滅入らせるとすれば、図書館は達郎を脅えさせた。

そこは本当に社会から見捨てられた、惨めな落伍者たちの最後の
行き場のような場所だった。

彼らは雑誌やベストセラーを読む振りをしながら、独り言を呟
いていた。鼻クソをほじり、それを指先で床に弾き飛ばす汚い老人も
いれば、煩い音を立てる老人もいるし、第一嫌な臭いがした。

ここに居るときの彼らは、おどおどしているように見えた。なぜ
なら図書館の三十前後の係が、自分たちに対して大きな権限を持っ
ているのを知っているからだ。

若くても彼らは、年寄りたちを図書館から追い出して暖を取らせ
ないようにすることが出来るのだ。

外は寒い。だからサンドイッチも係の顔色を窺いながらこそそそ
と食べる者もいた。

心の中の尽きない怒りを独り言で発散したくて堪らない——そん
な彼らも出来るだけ静かにしようと努める。

だがいつもうまくいくとは限らない。係の一人は机の間を歩き回
るのが癖だった。

達郎がいるとき、一度そんなふうに戻って来た。

彼は自分の顔に、みんなと同じような落ち着きのなさが滲み出るのを感じた。それで、すぐに図書館を出て、それっきり二度と行かなかった。

次に、達郎は若いときに熱中したことがある、ジャズを聴きに行こうと思い立った。

繁華街の外れ、懐かしいその店はまだそこに有った。カランと音が鳴るドアはそのまま、かえって驚いてしまった。

ピアノの音だけで意外に静かだったので、身構えていた肩の力を抜いた。

薄暗い店内。なかなか慣れない目を細めて奥へ進むと、カウンターの手前のレコードプレイヤーの上に、オスカー・ピーターソンのLPジャケットが掛けられていた。

目を凝らし、後ろを見回すようにしてカウンターにはり付いた。若者が数人別々に座って居るだけだった。

「なににします?」

女の声に振り返った。カウンターの中で女が微笑んでいた。

「ああ……ウキスキーを」

そう言うのと、女は小首を傾げて見せた。それは可愛い仕草だが、仕草ほど若くも見えなかった。

「シングルで」と、付け加えた。

狭いカウンターの中で物に掴まりながら女は背を向けると、高いところに手を伸ばしてグラスを取った。

そのとき細い腰と肉付きの良い尻を目の前にして、達郎は久し振りに目を細めた。

働き始めたころ、少ない給料の中から小銭を握ってこの店に来ていたことを懐かしんだ。

もちろん、カウンターの中の女は違うけれど、ここで知り合った連中とは女の好き嫌いを当て合って、誰がものにするかで賑やかだった。

煙草の匂いと焦げ茶色に染まった店内は、あのときとなんら変わらないように見える。

「はじめて？」

そう言いながら、女はグラスを置いた。

「変わらないね」

と、達郎はグラスに手を添えた。

「え？」

「店さ」

「そう……古いらしいわ。あたしは最近だけど」

「そう」

達郎は女の顔をじっと見た。童顔で胸の谷間に二つ並んだホクロがコケティッシュだった。

見た目じゃ分からないが、歳は幾つぐらいなのだろう。さくらんぼを摘まんで、こっそりと口の中にすべり込ませた。そんな女の仕草に気づいて達郎は胸が躍った。

帰り道、達郎は思った。

公園も図書館も歓迎できる場所ではない。自分は違うと、自分自身に言い聞かせた。違う、絶対に……。

しかし、人間としての尊厳を保ち続けるのは難しかった。
妻が働き口を見つけたのだ。たいした仕事ではない。中くらいの
会社の食堂のパートだ。

でも、達郎はもう我慢ができなかった。鉄砲から出た弾のように
職安に飛んで行った。

「何でもいいから仕事を下さい」と頼み込んだ。

何でも構わない。仕事でさえあれば。
まわって来たのはトイレ掃除だった。

床をモップで拭き、トイレ全体を綺麗にする。時間はそうかから
ないので、余った時間をただ座って過ごした。

これでも仕事は仕事だ。いくらかでも金が入る。自立できる。そ
このところが小さいようで大きい。

いつもより少し早く家に帰った日のことだった。
妻と二人の娘の笑い声が聞こえて来た。達郎は台所のドアの外に
立って耳を傾けた。

「あの人がトイレ掃除をやるなんて、考えただけでも可笑しいわ」

と、晴子が言っているようだった。

達郎は自分が立ち聞きしなかった振りをして、また玄関へ戻り、今度は大きな音を立てて家の中へ入っていった。

でも、心は相当傷ついた。

2. 落葉

都会の喧騒から離れた郊外の駅近く。唐松林のはずれのカフェテラスで、石嶋晴子は所在なげに木洩れ日を眺めていた。

とっくに飲み終わったコーヒー・カップの底で、僅かに残った液体が陽に光っていた。一陣の冷えた風がテラスの上を吹き抜けた。

時間は午後の三時だった。

晴子はハンドバッグの中からコンパクトを取り出すと、蓋を開けて鏡を覗き込んだ。

そして、バッグの底にあったチューインガムを一枚、紙をむいて口に入れた。最近ガムを持ち歩くようになったのは、好きな男が出来てからだ。

だが、初めてガムを噛んだのは五歳の時だった。その頃住んでいた小さな町に、ある日ジープで乗りこんで来たアメリカ兵たちが、子供たちにガムやチョコレートを配った。終戦直後のことだ。

その数ヶ月前には、母の手を握ってB29が飛ぶ下を逃げ惑っていた。母と共に生死の境を彷徨った。

ガムは緑色の紙に包まれていた。味がすっかりなくなっても噛み続けた。

口がかったるくなると、取っておいした銀紙に包んでおき、また思い出すと包みから出して噛んだ。

だから、ガムを噛む時いつも脳裏に浮かぶのは、あのセピア色を帯びた秋の日の町なかの光景なのだった。

あの日は母とたまたま町へ出かけたときに、やって来ていた米兵たちからチューインガムを貰った。

隣り町から来たバスが舌のような形をした方向指示器をペロツと出しながら、プッシューと大きな溜め息をついて停留所に停まったとき、晴子も大事そうにガムを舌の上に乗せた。

乗ったバスが走り始めると、晴子にとってとても大きな出来事が待っていた。

後部座席の方から大きな声で母を呼ぶ声がした。奥を見ると母と同じ年格好の女の人が上気した顔で叫んでいた。

その人の傍には、床に積んだ荷物の上で髭だらけの男が腰掛けていて、身乗り出すようにして晴子の方を見ていた。

「あの人だーれ？」

と、晴子は母親を見上げた。ガムを噛みながら母のもんぺを握っていた。

「あんたの父ちゃんよ！」

満面の笑みで母は答えた。

ずっと後になって、あの日、父が帰還したのだと知った。
今でもチューインガムを見ると、あの日のことが思い出される。

アメリカの兵隊たちが、どうしてそんなに親切だったのか分からなかったが、ジープも米兵たちの軍服も、あの日たち込めていた空気さえも、すべてセピア色のままだ。

まるで古い映画のひとコマのように思い出される。

だが、今はもう一九九〇年だ。あれから四十五年の歳月が流れたのだ。世の中の移り変わりには驚くばかりだった。

今も晴子はチューインガムを噛みしめている。

彼女は今、自分の女としての人生の盛りが、まさに閉じようとし

ているのを静かに感じている。

待ち合わせた男は、なかなか現れない。しかし、はっきりと時間を決めて待ち合わせたわけではなかった。

昼下がりに、と彼は言った。

この郊外のはずれの町には、慌ただしく過ぎる時間などない。時はゆっくりと、ただひたひたと近づいて来ては過ぎてゆくだけだ。

晴子は自分がこうして男を待っていることに、改めて驚いた。

彼女はごく普通の貞淑な妻であった。彼女のその後の人生で何も起こりはしなかった。

何も変わりはしなかった。同じ安泰と波乱のない時間が、脈々と流れ続けるほかには……。

ただ、流れる時の早さが、年々早くなっていったのだ。脇目もふらぬ急ぎ足で、駆け抜けていくのだ。

死ぬ前に、老いて朽ちる前に——たぶんまだ薄暗闇の中でなら辛うじて自分の裸体を男の前に投げだすことが出来るうちに——晴子にはしておかなければならないことがあるような気がした。

口の中のチューインガムは、とつくに甘さを失っていた。彼女はそれを紙にとると、飴玉を包むように銀紙の両端をねじってテープの上に置いた。

それからまた、無意識に新しい一枚を口に入れた。

たった一人の男しか知らないで、人生を終わるのが切ないわけはなかった。ただ、ひたすらに過ぎていく女の季節を、駈け足で過ぎていくのに任せておけなかった。

狂おしくさえ思った。時を止めることも、流れに逆らって泳ぐことも出来ないのなら、自分で自分に楔を打ち込むしかないではないか。

『おまえは率直なところ、本当は何がしたいのか』

と、晴子は自分の心に問いかけた。

尊敬されること、愛し慕われること、必要とされること、世の中に何か仕事で認めてもらうこと――。

そうではない。そんな抽象的なものではなかった。

彼女がやりたいのは、ただひとつのことだけ。女が女の季節でやり残してきたこと。

まさに、そのことであつた。

残された時間は僅か。一年、もしかして二年かもしれない。晴子は鏡の中で、首のたるみを耳の後ろの方へ引っ張りながら、いつも思っていた。それが始まりだった。

彼女が直面しているのは老いについてであつたが、その厳然とした事実の前では、モラルも色褪せるのだ。

テーブルの上のチューインガムの飴玉しぼりが三つに増えていた。木洩れ日が、透明な光り輝く雪片のように、唐松のあいだを絶え間なく舞い降りている。

おまえは今、幸せか？

これが、おまえのしたかったことなのか？

けれども以前よりも、今のほうが遥かにひもじい気がするのとはなぜなのか。

「逃げない？　ねえ、一緒に逃げましょ」

と、彼女は男に言ったのだった。

晴子が働いている社員食堂で料理人をしている男は、夫より若いわけではなく、夫より見栄えが良いわけでも、夫よりセックスがうまくいってもなかった。

それでも、晴子は逃げて行かなければならないと思った。

男には捨てるべき家族はなかった。妻とは死別していた。

「逃げよう」と、男は同意した。

日時が決められ、場所の相談も纏まった。
深く考えたわけではない。結局は何処でも良かったのかも知れないと思った。

晴子は自分の荷物が入ったバッグを眺めた。歯ブラシと、彼女名義の預金通帳が一冊。それだけだった。

それから、温めればすぐに食べられるようにしてきた今夜の家族の為の食事のことを考えた。

だが、次の日のことまでは考えていない。

待っている男のことが恋しかった。刻々と恋しさが募った。

すでに母は亡くなり、父は耄碌もうろくして晴子の顔も分らないときがある。

自分が天涯孤独な孤児のような気がしていた。

娘たちはもう大人だ。きっと分かってくれるだろう。
今、自分がすがり付けるのは彼だけなのだ。

それから、男のどこか貧相な顔つきと、癪の強そうな口元を思った。気に入らないと怒り出すような性格であることが容易に察せられた。

晴子の夫・達郎は定年退職したばかりだが、今まで怒って妻子に手を上げたことはない。晴子の知るかぎり浮気もしていなかった。

それにも係わらず、その男だけがすべてだった。彼が晴子の季節の終わりに、楔を打ちこんだから……？

いつのまにか、夕日が降りかけている。落葉した唐松に黄昏の気配が混じり始める。

ついに男は来なかった。死んでも必ず行くよ、と約束したのに。

交通事故かも知れないと、ふと思った。道路のアスファルトに叩きつけられた男の姿が、一瞬、目に浮かんだ。

男の死を想像した。
でも、悲しくはなかった。

晴子のイメージの中で男が死ぬと、彼女は立ち上がった。急げば家族の夕食に間にあうかも知れない、と思った。

目の前のテーブルには、ガムの飴玉しぼりが六個になっていた。

3. 十字路

夕刻、達郎は何も考えずに、ただ通りを歩いていた。ポケットの中には、やけ酒の一杯や、煙草を買う金はある。

小銭をジャラジャラ鳴らした。金というものはすっかりなくなるまで、それがどれだけ大切なものか、まったく気付かないものだ。

日々溜まりにたまった鬱憤のせいなのか、歩くたびに胃のあたりがムカついた。この歳になると、若いときには耐えられたことが耐えられなくなってきた。

心の中の尽きない怒り。それを独り言でも発散したくてたまらない。

十字路に差ししかかったとき、すぐ目の前を一人の若者が横切った。達郎はぶつかりそうになるのを何とか踏みとどまったが、情けないことに膝に痛みが走った。すると、

「危ぶねえな！」

と、急に切れたような言葉が己の口を突いて出たのだ。自分でも驚いた。

「ああ!？」

男が振り返った。まだ二十歳前後に見える。眉を寄せ、凄んだ顔付きで戻って来た男を見て、達郎は目を開けたままだったが、心では閉じようとしていた。

これは拙いと思った矢先、力強い腕で胸ぐらを掴まれた。

「なんか言いましたかあ？」

妙に押さえた口調が恐い。

「いや……」

最悪だ。相手の口にくわえた煙草の灰が、達郎の胸元にぱらぱらと落ちた。

だが、別の男が横から近づいて来て言った。

「おい！ よせ。行こうぜ」

去っていく男達を見ながら、心臓の動悸が激しくなった。

気が付くと繁華街を避けて歩いていた。普段は足を向けられないような随分寂しい場所だ。

少し後ろの反対側の歩道から足音がついて来る。この先の川沿いの廃墟となった家々に、まだ誰かが住んでいるという噂は聞いたことがあったが、もしかしたら先ほどの連中だろうか。

やはり腹に据えかねて戻って来たのだろうか。だが、つけて来るのは女だと確信した。

女が薄暗い街灯の下によりよる歩み出て来たとき、その独特な足音で相手が誰かはすぐ分かった。

ここにも引退を考えなきゃならない人間がいる。あの仕事をこれだけ続ければ、もうたくさんだろう。彼女はそれだけ働いている。

達郎が知る限り、彼女は街中の男の噂になっていた。ミサコ。オリンピック通りの角に立ち、どこかの男が引っかかってくるのを待っている女。

彼女は決して諦めようとしなない。

ときには何日か姿を現さないと、みんなはやっとミサコも廃業したのかと思う。

だが、その次の日とか、次の次の日の夜になると彼女はまた戻っ

て来て、いつもの角に立っているのだ。

噂は確かなのだろう。彼女の右足は病んでいた。見たことがある——つまり寝たことがある——という男の話では、ミサコの右足の内側には大きな手術跡が残っているという。

達郎はミサコには目もくれず、川の方へ足を向けた。もうすぐ家へ帰り、妻を起こさないように台所で着替えて、寝床へ入らなければならぬ。廊下の一部は軋んで大きな音を出すので、そこだけは踏んではならない……。

ミサコがよろよろと向かって来た。達郎はイラついた。まったくもって道路は十分広いし、俺の方に近付かなくなたって、通り過ぎることなんか分けないじゃないか。

それとも……。

「お久しぶり」

と、ミサコは言った。「どんよりして星が見えないし、雨でも降るのかしらね」

ミサコは相手の様子を窺っているようだったが、相手が喋らないと分かると、

「どうしたの？ オジサン、猫にでもベロを喰われちゃったの？」

「今夜は止めとくよ」

達郎は自分の声が擦れるのを聞いた。おどおどしている少年のよ
うな声だと自分で思った。「お断りするよ」

「お断りするって!？ いったい何のときさ。あたしは何も申し出
ちやいないわよ。ただ、雨がどうのと言っただけじゃない。雨が降
るかも……そうでしょ?」

「ああ」

「まったく……」

ミサコはそれから、ぶつぶつと独り言を言った。

達郎は、ミサコをそのまま放って歩き出そうと思ったが、気にな
ってその顔を覗き見た。

自分の嘆きを、独り言を、まるで温もりのように抱きしめている
女。

達郎は僅かだがミサコが可哀想に思えてきた。マフラーで顔が半
分ほどしか見えないが、噂では四十は越えているとのことだった。

不健康そうで弱々しい足取りは、もう客を探すような状況ではな
い。いったい幾ら取るのだろうか、と達郎は思った。

「あたし、昔からこのあたりに住んでるのよ。もうちょっと先の“立ち退き”通りだけど」

ミサコは川に背を向け、反対側の荒れ果てた家並みを見ながら立っている。

「寂しい所だよね、ここは」

ミサコは達郎を見た。何かを言おうとしてか、急に喉を詰まらせたようにして咳をした。咳は止まらなくなって体を二つに折り、ミサコは近くの壁に手をついた。

やっと体を伸ばしたとき、ミサコは手袋をはめた手で口元を覆った。手袋は淡いグレーのスエードで出来ていて、不釣り合いに上品な印象を与えていた。

「どこの人？」

と、ミサコは肩をすぼめると、マフラーをまた深々と巻き直した。

「ここからバスで南の方だ」

「中央通りの外れのほう？」

達郎は、髪から覗いているミサコの耳を見た。彼は、ミサコがどんなふうになるのかと、思いを巡らしている自分に気付いた。

どんなふうにするのだろうか……。毎晩のように、もううんざりしているに違いない。

妻は……。でも妻は違う。達郎は妻と年に二度するかどうかも疑問に思った。彼はできるだけ妻を一人にしておいたし、妻もそれを理解し、達郎に感謝していたはずだ。

とにかく妻は、そんなことにはあまり深入りしなかった。

でももしかしたら、かつてのミサコもそうだったのだろうか。これは単なる仕事だったのか。

「……もちろん、あの頃にはテレビなんかなかったし」

女は勝手に喋っていた。「だからみんな、自分で自分の楽しみを作り出さなきゃならなかったの」

「ああ、それが上手だった」
適当な相槌を打った。

「そうよ」

「この頃は何でも手近にあるから、誰も何にも努力しない」

このあと沈黙が流れたが、やや親しみが漂うようになっていた。達郎は空気の匂いを嗅いだ。ときどき川の傍に立っていると、夜明けの匂いを嗅ぐことができる。空が明るくなる何時間も前に。それは素晴らしい時間だ。緊張も苦しみもすべて溶け去って、ただどんな人生が現れるのかを待つだけ……。

「ねえ、あたしの家へ来ない？」

その質問は、達郎にとって衝撃だった。即座に『いいや』と答えるべきだったかも知れない。

だが、達郎はそうしなかった。遅れて『いいや』と答えようと口を開こうとしたとき、達郎はそれが自分の本意ではないことに気付いた。

ミサコと一緒に川沿いの道を曲がって歩いた。

「名前はなんていうの？」

「石嶋だ」

「それは名字」

「……達郎だ」

あまり自分のことを知られたくはない。いったい自分は何に首を突っ込もうとしているのか。きっとロクでもないことだ。

「あたしはミサコ」

達郎は『知っている』と言うべきかどうか迷ったが、言わないことにした。

相手は相当酔っていて、もし知っているとさえ、達郎が誘いをかけていると思うかも知れないからだ。

達郎はどうしてこんなことになったのか分からなかった。

でも、最後までついて行く必要はなかった。いつでも踵を返して歩き去ることだってできる。達郎は決心して、ビールと安っぽい香水の匂いから立ち去ろうとした。

「ねえ、ちょっと!」

ミサコはまるで小さな女の子のように、達郎の袖口にしがみついた。

「いいかい？　俺は羽振りがよくないんだよ」

「今夜は五千円でいいよ。なけりゃあ出せるだけでいい」

五千円だって！　年金暮らしのこの俺から五千円が出せるとでも？

達郎の心には、『汚らしい』という言葉が浮かんだが、口にはしなかった。生めかしい安香水の匂いが、達郎の喉を封じた。

「さあ」とミサコは言った。「たまには自分にご褒美をあげなさいよ。分からないじゃない。結構楽しめるかも知れないじゃないの」

「いや……」

「すぐ近くよ。次の角を曲がったところ」

両側の家には板が打ちつけられ、住んでいる人はいない。二人の足音が^{ひとけ}人気のない通りに響いた。

「人生は金だけじゃないわ」

「酔ってるんだな」

「感謝しなさい」

女はまるで小学校の先生を気取るかのように言った。「素面しらふなら、あたしはオジサンを誘わなかったかも知れないよ」

達郎は部屋の真ん中に薄汚れた布団が敷かれている場面を想像し始めていた。二人は角を曲がって別の通りへ出た。

「ここよ。着いたわ」

草がひとかたまり生え、通りへと続く階段があった。

「牛乳ビンに気をつけて。あれを蹴飛ばしたら、そこらじゅうの人們たちが起きちゃうからね」

達郎はこの辺りには他に誰も住んで居ないことは分かっていた。二人は一緒に階段をよろよろ上がった。

ミサコは大きな身振りで、「静かに」という合図を送った。達郎は薄暗い足元に躓きながら、ミサコにもたれかかって階段を上がった。それはまるで、達郎の方が酔っ払っているように見えた。

だが、それが返って二人で何かを共謀しているような気持ちを生んだ。達郎はこの出来事を楽しむ気分になっていた。

窓には曇りガラスが入り、カーテンが下がっている。ミサコは鍵を探した。

そして、二人は中へ入った。

だが、部屋に灯りが点いた途端、達郎は気持ちが萎えてしまった。布団は灰色で、乱れたままだ。それが部屋のほとんどを占領している。

ミサコは靴を蹴って脱いだ。

「やれやれ」と。

それは妻の晴子が一日の終わりに、いつも口にする言葉と同じだった。その言葉に、股のつけ根がウズウズする感じも消えてしまった。

達郎はドアの近くにとりあえず腰を下ろした。ゆっくりと。

布団の傍のテーブルの上に写真が飾ってあるが、古い写真で黄ばんでいる。裸電球がドアの隙間から入ってくる風に揺れている。

ミサコは部屋の奥へ行くと、やかんに水を注ぎ、コンロに火をつけた。

近づいてくるミサコに達郎は何か言おうとした。

「俺はどうも……」
と立ち上がった。

「あら、大丈夫よ」
そう言ってミサコは、達郎のズボンのベルトを緩めた。「待ってなさい」

また、女教師のような言い方をして、着ているものを捨てるように脱いだ。

それを待っているあいだ、達郎は廊下に立たされた生徒のような気分で、なんとも情けない。

それにしても久しぶりの出来事だった。見ず知らずの女の前で、まるで童貞のように立っている。

ミサコが一糸纏わぬ姿で目の前にひざまずいた。白い胸に二つ並んだホクロが艶かしさを助長していた。

達郎は、さくらんぼを指で摘まんで口の中にすべり込ませる女の仕草を思い出した。

「きみは!？」

達郎は前屈みになり、先ほどまでマフラーで分からなかったミサコの顎に手をやると、顔を上げさせた。

「やだっ、今ごろ気がついたってわけ？ 通りで『久しぶり』って声をかけたじゃない」

ジャズ喫茶の女はそのまま後ろへ倒れると、けらけらと笑い転げた。電球の灯りが、彼女の顔を、胸を、ばたつかせる足を照らしていた。

「てっきり分かってると思っていたわ、はあっ……はっ……ああ、可笑しい」

達郎はやや鼻白んだが、意に反して股間のものは意思を示し始めていた。それは、あの店の女だと分かったからなのか。

いづれにしても、初老とはいえ男の面子めんつが立つというものだった。

4. 朝は来る

目が覚めると朝だった。

達郎は床に散らばった服や靴を見て、どうしてこんなに酷く散らかっているのかと勘違いした。

すぐに昨晚のことを思い出し、素っ裸のまま寝入ったのだと理解した。

もそもそと起き出して服を拾い集めた。

彼は今、ショックを受けているのか、嬉しかったのか分からなかった。

達郎はミサコを見下ろした。その姿は、まるで妻が寝ているようにも思えた。

口をやや開けぎみで、息をするたびに一房の髪が揺れる。その光景に達郎はたじろいだ——この女が、妻のように見えてはならない！

達郎はずっと、世の中には二種類の女がいると思っていた。マトモな女と、それ以外の女だ。

だから、見かけも違っているはず。そうでなければ区別がつかない。

草臥れたミサコの寝顔。彼女の腹には一筋の線があった。その線は臍から股の茂みに向かって伸びている。

いつのことか分らないが、子供を産んだのだろうか。だが、ミサコに家族がいるという噂は一度も聞いたことがなかった。

達郎は、今度は自分の身体を見下ろした。項垂れた男性自身を見る。ズボンを引き上げる前にもう一度見やった。

そして思った。早く家に帰らなければ。

ミサコが目覚まさないように、何故か気を使う。

そっと金を数えると、それを枕元に置いた。だが一瞬考え、千円札を一枚サイフに戻した。やり過ぎることはないんだ、こんな女に。

金を置かずに出て行くことだって出来る。確か、幾らでもいいと言っていたではないか。

さあ、帰ろう。ミサコが目覚ますかも知れない。あんな格好で口を開けて眠っているのだから、喉が乾いてそろそろ目が覚める頃だろう。

達郎は片膝をついてから、おもむろに立ち上がった。

「あたしだって必死なんだよ……」

寝言だと思った。ミサコはちよつと身じろぐと、体を横に向けた。

そして、誰かから自分を守らなければならぬのを知っているかのように、膝を閉じ、掛け布団を巻きつけるように勢いよく引いた。

それを抱え込むようにして丸く背を向けたので、女の脚が剥き出しになった。

達郎は覗き込むようにして、ミサコの右足の付け根に残る痛々しい傷跡を見た。

そのワケは誰も知らない。女が話さないから誰も知らないのだ。必死に生きている……。

この街ではミサコのような女たちはみな、それぞれワケがあつて夜の街角に立っている。

彼はミサコの体に掛け布団を掛け直してから戸口に立った。一段一段、罪の意識を置き去りにするように階段を下りた。

見上げると、朝日が眩しかった。階段の下で大きく深呼吸してから川へ向かった。

最初の角を曲がる時、何気なく振り返って見た。階段の上のドアが開いていて、裸の肩を毛布で包んだミサコが立っているのが見えた。だが、すぐにドアは閉じられた。

きっとまた寢床に戻り、昼ごろ起き出してジャズ喫茶で働くのだろう。そして月が屋根の向こうにかかるころ、オリンピック通りの角にいつものように立っているに違いない。

彼の足どりは意外に軽やかだった。達郎はまた、昔の自分を取り戻しつつあった。

夜の行為を誇りと、楽しさと、恥ずかしさの入り交じった、そんな感情で振り返ることのできる、かつての自分を……。

鳥が川の上を舞っている。そのうちの一羽が群れから離れ、鉄橋の下をくぐり抜けた。翼に一瞬影が落ちたが、それはすぐに明るい光の下で輝いた。

空気を吸い込むと肺が痛んだ。煙草を止めることを真剣に考えた方がいいだろうか。

達郎は、去年死んだ親戚の子の葬式のことを思い出した。

まだ自分の半分にもならない歳だった。それは気の毒なことだったが、その子のことを思い出しながら、達郎はちゃんと背筋を伸ば

した。

自分はまだ、どれだけの人生を生きなければならないか。いや、自分の中にまだどれだけの人生が詰まっているのか……。

そんなことを考えた途端、彼はふふっと口角を上げて笑った。そうだ、たまには置時計でも磨くとするか。

耳のひしゃげた三毛猫が目の前を横切った。いつもなら猫など気にもかけないのだが、達郎はこの猫とは視線を交わした。

皮肉な、認めるような眼差しで、猫は達郎を睨み返した。達郎の道と、猫の道が出会い、交差し、また別れる。

彼は今、口笛を吹きながら自分の道を歩いていた。家に着いたとき、何と言ったらいいいのか考えてもいない。

『あら、あなた、どこに泊まってらしたの？』

晴子のそんな皮肉が聞こえてきそうだ。

だが今では、それも軽く受け流すことが出来そうだった。なんといっても、晴子是自己に最も近い女だ。

娘二人だって母親ほどでなくても、ときどき気にかけてくれる。

達郎は歩きながら足元を見た。朝日に背を向け、揺れる己の影を見ながら、この季節にしては眩し過ぎるほどの陽光を感じていた。

彼は今、ポケットの中でジャラっと小銭を鳴らして、我が家へと足を向けた。

「了」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2933p/>

錆びた心 ～かつての自分をとり戻すために～

2010年12月23日12時32分発行